

# 爬虫類

## 1 選定・評価方法の概要

東京都産(本土部)の爬虫類は外来種を除き14種であり、その内訳はカメ類3種、トカゲ類3種、ヘビ類8種の合計14種である。検討対象種はこれら14種全てとした。

絶滅のおそれの評価は、基本的に定性的要件を用いた。東京都産の爬虫類に関しては、分布、生息状況に関する客観的データが極めて少なかったため、他の専門研究者の助言を受けて評価作業を行った。

## 2 選定・評価結果の概要

評価作業の結果、全14種が本レッドリストの掲載種に選定された。クサガメについては、最新の研究により国内の個体群は古い時代の移入種の可能性が非常に高いことが示唆されているが、現時点では判断が困難である。そのため、今回は「情報不足」(DD)とした。

ニホンイシガメについては、以前からのペット用販売状況などを考慮すると、多くが放逐個体であると考えられる。しかし、分布域を全て細かく調査することが難しく、在来個体との見分けが極めて困難であるのが現状である。環境保全の観点からいえば、累代的繁殖地域などが発見された場合はその個体群の由来に関係なく、その周辺も含めた環境が高く評価されなくてはならない。このようにニホンイシガメに関しては総合的な判断から評価した。

ニホンヤモリは、以前は区部で最も多く広範囲に生息していた種で、シナントロープ\*の代表ともいえる生物であったが、区部では明らかに分布域と個体数に減少傾向が見られる。理由の1つに建築物の構造が大きく変化し、古い人家などがなくなったことが容易に想像がつく。その他には主なエサとなる昆虫類の種数や個体数の変化や減少が考えられる。ニホンヤモリは同じシナントロープのアオダイショウ(幼蛇)のエサとなることが知られているので、区部のアオダイショウの変化とも関係していると考えられる。また以前には分布していなかったとされる南多摩地域、西多摩地域でも度々観察されており、明らかに分布を広げている。ニホンヤモリを捕食する可能性があるシロマダラなどのヘビ類の個体数や分布に変化が出るか留意する必要がある。そのため、ニホンヤモリを留意種としてとりあげた。

ニホンカナヘビとニホントカゲに関しては2種間で生息環境の違いが知られているが、区部をはじめ多くの地域でニホンカナヘビが好む、陽当たりの良い草原が著しく少なくなり、かつてはどこにでも普通に生息していたニホンカナヘビも、一般的に考えられているほど個体数は多くないと考えられる。それは陽当たりの良い草原と隣接した石垣やガレキ場、それらをふくむ斜面などを好むニホントカゲにも言えることである。

ヘビ類については、区部で生息環境の悪化が見られ、特にタカチホヘビなど極めて乾燥に弱い種は特殊性を持った一部の地域を除いて、その生息状況はほぼ壊滅的と考えられる。その他の地域でもシマヘビ、ヤマカガシなど以前は普通に見られた種も著しく減少し、とくにヤマカガシの減少には注目すべきである。その1つの原因として考えられるのは、水田の急速な減少であるように思える。

またマムシに関しては、以前は区部でも確かな目撃例があったが、現在ではほぼ無くなっている。生息密度が高いといわれていた南多摩地域、西多摩地域でも、一般的に考えられているほど個体数が多かったとは思えない。近隣の似たような生息環境と比較しても明らかに少なく思える。一因に、マムシは水辺を好む種であるために、水辺(水田)の減少が関係しているのかもしれない。

この生物群は東京都(本土部)では、その多くの種が極めて深刻な状況であると考えられる。

爬虫類はイノシシを主とした雑食性の大型哺乳類の増加により直接的または間接的なダメージ

を受けやすく、短時間で個体数が激減する可能性がある。イノシシの他には外来種のアライグマも被害を与えると考えられる。

また、スッポンではシナスッポンとの交雑が、ニホンイシガメ、クサガメでは、お互いは無論、特にアジア産淡水ガメとの交雑が容易に行われるため注意を要する。

\*シナントロープ (Synanthrope): 「人とともに」といった意味の造語で、人間の住居や生活環境を巧みに利用し、繁殖し、利益を得ている生物のことを指す。代表的な生き物として、スズメ、ツバメ、一部のゴキブリの仲間、クマネズミ、ドブネズミなどがある。

(長坂 拓也)

## ニホンイシガメ ※備考 (p.387)

*Mauremys japonica*

カメ目  
イシガメ科



### 【形態・生態】

最大甲長雄 14cm、雌 21cm 程度。背甲は黄土色や赤みを帯びた褐色で、不明瞭な模様が混在し中央に1本の不連続なうね(キール)が走る。背甲の後縁は鋸歯状、四肢と腹甲は黒色。幼体の背甲はより明るい色で後縁の鋸歯状が顕著。魚、水生昆虫など肉食傾向の強い雑食性。

### 【分布の概要】

本州、四国、九州

### 【都における生息環境】

主に山麓部の河川、池沼、水田や隣接した小川に生息し、やや低水温を好む。

### 【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

一般に考えられている以上に活動性が高く、通常生息地である水辺(水底は汚染されていない適度な深さのある泥や砂などが必要)だけでなく産卵場所、幼亀が過ごす水域、採餌場など種の存続にはかなりの広い面積と多様な環境を必要とするため、保全に際してはそれらを十分考慮する必要がある。

### 【関連文献】

千石正一ら, 1996; 内山りゅうら, 2002.

(執筆: 長坂拓也)



## クサガメ ※備考 (p.387)

*Chinemys reevesii*

カメ目  
イシガメ科



### 【形態・生態】

最大甲長雄 20cm、雌 30cm 程度。背甲に3本の発達したうね(キール)が走り、通常各甲板は黒褐色で黄緑色の縁取りがある。雄は成長すると全身黒色になり、ニホンイシガメなどと間違えられやすい。危険を感じると四肢の付け根の臭腺から嫌な臭いを出す。魚の死体や貝類、甲殻類など肉食傾向の強い雑食性。現在は移入種との見解が主流である。

### 【分布の概要】

本州、四国、九州

### 【都における生息環境】

主に平地の河川や池沼、水田や隣接した小川に生息する。

### 【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

一般に考えられている以上に活動性が高く、通常生息地である水辺(水底は汚染されていない適度な深さのある泥や砂などが必要)だけでなく産卵場所、幼亀が過ごす水域、採餌場など種の存続にはかなりの広い面積と多様な環境を必要とするため、保全に際してはそれらを十分考慮する必要がある。

### 【関連文献】

千石正一ら, 1996; 内山りゅうら, 2002.

(執筆: 長坂拓也)



## ニホンスッポン ※備考 (p.387)

*Pelodiscus sinensis japonicus*

カメ目  
スッポン科



### 【形態・生態】

甲長 20 ~ 25cm 程度、最大 35cm。甲羅は扁平で他のカメにある甲板がない。甲羅はやわらかな皮膚に覆われ、水かきが発達し鼻先が突出する。肉食傾向が強く魚、甲殻類、水生昆虫、ミミズ類、貝類などを食べる。大陸産のものが養殖用に大量に輸入され、野外で交雑が進んでいるので、日本垂種の同定は専門の研究者に託すと良い。

### 【分布の概要】

本州、四国、九州、南西諸島

### 【都における生息環境】

水底が砂泥質の沼、池、河川に好んで生息する。

### 【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

一般に考えられている以上に活動性が高く、通常生息地である水辺(水底は汚染されていない適度な深さのある泥や砂などが必要)だけでなく産卵場所、幼亀が過ごす水域、採餌場など種の存続にはかなりの広い面積と多様な環境を必要とするため、保全に際してはそれらを十分考慮する必要がある。

### 【関連文献】

千石正一ら, 1996; 内山りゅうら, 2002.

(執筆: 長坂拓也)



## ニホンヤモリ

*Gekko japonicus*

トカゲ目  
ヤモリ科



### 【形態・生態】

全長 10～14cm 程度。体色は淡い灰色に暗褐色の斑紋があるが、温度などにより大きく変わる。体は平たく指先が扁平で壁を垂直に登ったり、天井なども巧みに素早く動く。尾は自切する。脛がなく目を閉じることはない。夜行性でガ類など昆虫類、クモ類を食べる。古い時代の大陸からの移入種。

### 【分布の概要】

本州、四国、九州

### 【都における生息環境】

人間とうまく共存している動物(シナントロープ)であり、主に民家や寺院、その周辺などに見られる。

### 【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

急速に都市化が進み、気密性の高い現代の建築物が増加するにつれて、すみかとなっていた古い家屋などが減少し、本種の生息環境が悪化する可能性がある。

### 【関連文献】

千石正一ら, 1996; 内山りゅうら, 2002.

(執筆: 長坂拓也)



## ニホントカゲ

*Plestiodon japonicus*

トカゲ目  
トカゲ科



### 【形態・生態】

全長 20～25cm 程度。体鱗には光沢があり、オスの成体は頭部が発達し、繁殖期はのどや腹部がオレンジ色になる。オスは背面が茶褐色で体側に黒褐色の帯がある。メスは幼体の体色があせた感じで、幼体は背面が黒く黄白色の5本の縦縞が入り、尾は鮮やかなコバルトブルー。昼行性でクモ類、昆虫類、陸生甲殻類などを食べる肉食性。尾は自切する。

### 【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

### 【都における生息環境】

市街地から山地まで広く分布し、日当たりのよい草地や石垣などがある環境を好む。

### 【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

以前は区部を含め各地域で普通に見られたが、都市化が進み草地、古い石垣など身体を隠したり越冬、産卵する場所が減少し、個体数の減少が目立つ。また餌となるクモ類、昆虫類なども減少している。

### 【関連文献】

千石正一ら, 1996; 内山りゅうら, 2002.

(執筆: 長坂拓也)



## ニホンカナヘビ

*Takydromus tachydromoides*

トカゲ目  
カナヘビ科



### 【形態・生態】

全長 16～27cm 程度。ニホントカゲに比べずつと細身で尾は長く全長の3分の2強。体色は背面が褐色、腹面は白または黄色。体側に白と暗褐色の縞がはしる。背面の鱗にはうね(キール)があり、ザラザラした感じ。幼体の体色は全体に暗く、特に尾部は顕著。昼行性でクモ類や昆虫類、ダンゴムシなど陸生甲殻類などを食べる肉食性。尾は自切する。

### 【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

### 【都における生息環境】

市街地から低山地まで広く分布し、日当たりのよい草地や藪を好む。

### 【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

以前は区部を含め各地域で普通に見られたが、都市化が進み空き地ややぶなどが減少するにつれて、身体を隠したり越冬、産卵する場所が減少し、個体数の減少が目立つ。また餌となるクモ類、昆虫類なども減少している。

### 【関連文献】

千石正一ら, 1996; 内山りゅうら, 2002.

(執筆: 長坂拓也)



## ジムグリ

*Euprepiophis conspicillatus*

トカゲ目  
ナミヘビ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
CR	CR	VU	NT	

### 【形態・生態】

全長 70 ~ 100cm 程度。背面の体色は褐色や赤みを帯びた茶褐色で小さな黒点がちらばる。幼蛇の背面は鮮やかな赤褐色や赤色で黒褐色の斑点や横帯がならび、多くは頭部に逆V字形の模様がある。地中生活傾向が強く、高温に弱いため春と秋に活発になり、夏は不活発。小型のネズミ類やモグラ類など小型哺乳類を専食する。

### 【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

### 【都における生息環境】

主に丘陵地から山地に生息し、特に森林に多く耕作地や草地にも見られる。

### 【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

小型のネズミ類やモグラ類などの餌となる生物が多数生息できる環境がなければ生息できないことから、特に区部、北多摩については、生息環境が少なくなっていると考えられる。また、他のヘビより低い温度を好むため、近年の区部での気温の上昇も個体数減少の主な要因と考える。

### 【関連文献】

千石正一ら, 1996; 内山りゅうら, 2002.

(執筆: 長坂拓也)



## タカチホヘビ

*Achalinus spinalis*

トカゲ目  
ナミヘビ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
DD	—	VU	NT	

### 【形態・生態】

全長 30 ~ 60cm 程度。体色は褐色から黄褐色で背面中央に黒く縦条が入る。また幼蛇は全体に黒っぽく縦条が不鮮明。成長するにつれ、黄褐色やそれに近い体色になる。体鱗は重ならずビーズ状で虹色の光沢があり、美しい。地中生活をしており乾燥に極めて弱い。目は極端に小さく、夜行性でミミズ類を専食する。

### 【分布の概要】

本州、四国、九州

### 【都における生息環境】

平地から山地の主に樹林環境周辺に広く分布している。

### 【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

林道整備や河川の改修、宅地開発などによる樹林の伐採が進むことにより、乾燥化が進み生息環境の減少が懸念される。可能な限り樹林環境を保全することが望ましい。なお、イノシシの増加に伴う捕食圧にも留意する必要がある。

### 【関連文献】

千石正一ら, 1996; 内山りゅうら, 2002.

(執筆: 長坂拓也)



## アオダイショウ

*Elaphe climacophora*

トカゲ目  
ナミヘビ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
NT	NT	NT	NT	

### 【形態・生態】

全長 110 ~ 190cm 程度で、本土最大のヘビ。体色は褐色からオリブ色と個体差が大きい。背面に黒色や暗褐色の不明瞭な4本の縞が入る。幼蛇ははしご状の斑紋が並び、マムシとよく間違えられる。樹上性傾向があり立体的な運動能力が非常に高いが地上でも活発に活動する。成蛇は主にネズミ類と鳥類を捕食する。幼蛇はカエル類、トカゲ類、ヤモリを好食し、成蛇と大きく違う。

### 【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

### 【都における生息環境】

平地から山地の民家周辺から森林まで様々な環境に見られる。人間とうまく共存している動物(シナントロープ)である。

### 【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

急速な都市化により、本種がこれまで主に生息場所としてきた住宅建築物の構造が大きく変化したため、個体数が減少していると考えられる。

### 【関連文献】

千石正一ら, 1996; 内山りゅうら, 2002.

(執筆: 長坂拓也)



## シマヘビ

*Elaphe quadrivirgata*

トカゲ目  
ナミヘビ科



### 【形態・生態】

全長 80 ~ 150cm 程度。背面は淡褐色の地肌に黒褐色の 4 本の縦縞が入るのが一般的。ただしカラスヘビと呼ばれる全身真っ黒の個体などでも様々な変異のある種。虹彩は赤色。幼蛇は淡褐色から赤の強い赤褐色の地肌に暗赤色の横帯があり、縦縞はない。基本的に地上性だが木に登ることもある。幅広い食性を持つがカエル類を最も好み、トカゲ類や小型のヘビ類も好食する。他に小型哺乳類、鳥類、魚類などを食べる。

### 【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

### 【都における生息環境】

昼行性で日当たりのよい水辺周辺を好む。

### 【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部では、水田の減少により本種の好む水辺が無くなったことや、餌となる生物の爬虫類、カエル類の減少により、危機的な状況である。

### 【関連文献】

千石正一ら, 1996; 内山りゅうら, 2002.

(執筆: 長坂拓也)



## ヒバカリ

*Amphiesma vibakari vibakari*

トカゲ目  
ナミヘビ科



### 【形態・生態】

全長 40 ~ 60cm 程度。体色は淡褐色、茶褐色もしくは深緑色で、口角から頸部にかけて白色か黄白色の帯が斜めに入る。腹面は黄白色で両側に黒色の点列があり、体鱗にはキールがある。幼蛇は体色が黒色に近い褐色で、小型のためタカチホヘビと間違われることがある。主に早朝や夕方に活動し、カエル類、オタマジャクシ、小型魚類、ミミズ類を餌とし、それらが生息するやや湿った環境を好む。

### 【分布の概要】

本州、四国、九州

### 【都における生息環境】

平地から山地まで広く生息するが、特に水田や湿地などに多い。

### 【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

小型種であるため、小さな面積でもカエル類、オタマジャクシ、小型魚類、ミミズ類が生息するやや湿った環境が残っていると急激な減少を避けられるようである。このため、可能な限りそのような環境を保全することが望ましい。

### 【関連文献】

千石正一ら, 1996; 内山りゅうら, 2002.

(執筆: 長坂拓也)



## シロマダラ

*Dinodon orientale*

トカゲ目  
ナミヘビ科



### 【形態・生態】

全長 30 ~ 70cm 程度。淡褐色の体色に黒色の横帯があり、頭部は黒色。幼蛇の様子は成蛇と同じだが明暗がはっきりとし鮮明で、後頭部に白色部分が広がり、よく目立つ。基本的には地上性だが高所に登ることもある。夜行性でトカゲやヤモリ、小型のヘビなどを食べる。

### 【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

### 【都における生息環境】

平地から山地まで広く生息する。

### 【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

区部ではニホンヤモリとニホントカゲ、ニホンカナヘビなどを餌として、細々と生息していると考えられる。これらの餌となる生物が生息可能な環境を可能な限り保全することが望ましい。

### 【関連文献】

千石正一ら, 1996; 内山りゅうら, 2002.

(執筆: 長坂拓也)



## ヤマカガシ

*Rhabdophis tigrinus tigrinus*

トカゲ目  
ナミヘビ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
CR	VU	VU	VU	

### 【形態・生態】

全長 70 ~ 150cm 程度。体色は関東では体側に黒色と赤色の斑紋が交互にならび、頸部は黄色。幼蛇は成蛇と同じ体色で、より鮮明。上顎後方に毒牙をもち毒性は強く、深く咬まれたり、長時間咬まれると危険。また頸部背面には頸腺があり、強く圧迫すると毒が飛び散る。性質はおとなしい。もっぱらカエル類を捕食し、その他にオタマジャクシ、小型魚類を食べる。

### 【分布の概要】

本州、四国、九州

### 【都における生息環境】

平地から山地まで広く生息するが、特に水田や湿地などに多い。

### 【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

東京都本土部全域で生息地や個体数が減少しており、特に区部や北多摩では、水田が減少しカエル類が激減したのが主な要因と考えられる。

近年、毒蛇との認識が普及してきたことにより無駄に殺される事も多く、毒蛇に対する正しい対応の普及啓発が望まれる。

### 【関連文献】

千石正一ら, 1996; 内山りゅうら, 2002.

(執筆: 長坂拓也)



## ニホンマムシ

*Gloydus blomhoffii*

トカゲ目  
クサリヘビ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
CR	CR	CR EN	EN	

### 【形態・生態】

全長 40 ~ 65cm 程度。淡褐色に楕円形の暗色斑があり、斑の中央には暗色の点がある(銭型紋)。目と鼻孔の間の穴(ピット器官)が最大の特徴。上顎には長大な毒牙を持つ。おとなしいヘビで毒量も少ないが、毒性は強いので注意が必要。夜行性だが冬眠前後と夏には日光浴に出てくる。カエル類、ネズミ類を中心に捕食する。本土種では唯一胎生で8~10月に5~6匹の子蛇を生む。

### 【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

### 【都における生息環境】

豊かな自然環境がある平地の耕作地から山地の森林まで広く生息。

### 【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

本種は水辺や樹林などの多様な環境が必要なため、区部や北多摩ではほぼ絶滅状態であろう。南、西多摩では以前は非常に多いとされていたがそれほど多くなく、近県と比較しても明らかに少ない。主な要因として水辺(水田)の減少が関係している可能性がある。

### 【関連文献】

千石正一ら, 1996; 内山りゅうら, 2002.

(執筆: 長坂拓也)



**【種名・学名などの準拠文献】**

種名と配列は、日本爬虫両棲類学会による日本産爬虫両生類標準和名(2009年12月6日改訂案)に従った。ただしニホンスッポンについては、環境省版レッドリスト(絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト)(2006年改訂)(報道発表資料)に準じて、亜種名を表記した。

**【備考】**

和名	備考
ニホンイシガメ	放流された移入個体も生息しているが、ここでは在来個体群のみを評価対象とした。
クサガメ	
ニホンスッポン	

**【留意種とした理由】**

和名	地域区分	留意種とした理由
ニホンヤモリ	北多摩	急速に都市化が進んでおり、すみかとなる古い家屋などに変化が生じるなどして、本種の生息環境が悪化する可能性があるため。
	南多摩	
	西多摩	

## 【関連文献】

千石正一・疋田努・松井正文・仲谷一宏, 1996. 日本動物大百科 5 両生類・爬虫類・軟骨魚類. 平凡社. 190 pp.  
内山りゅう・前田憲男・沼田研児・関慎太郎, 2002. 決定版日本の両生爬虫類. 平凡社. 336 pp.